

議の次第といはねばならぬ。何となれば、後漢書西域傳が大夏の五翽侯の成立について記して居ることは、然く正確で疑ふべき餘地の無いことゝは考へ得られないからである。余はずつと以前から後漢書のこの記事に疑を抱き、五翽侯、従つて貴霜王家を月氏種族の王家と見ることは、何等の證據もないことであると信じ、大學に於る講義にも繰り返してこの次第を述べたのであつたが、その後我が桑原博士は「續史的研究」に於て「張騫の遠征」と題した一雄篇を公けにせられた頃、余に對してこれと同じ考を話されたことがあり、余も豫て同様に解釋して居ると答へたことがあつた。桑原博士は既にこゝに擧げた論文中の一節に於て詳密にこのことを論ぜられ、従來行はれて居る説の據るに足らざることを明らかにせられた。若し余の知る所にして過らないならば、學者のそれぞれ私に解釋して居る所は別として、公けに發表された論文でこの點を明らかに論述したのは、たゞこの一篇あるのみである。然もこの研究を載せた「續史的研究」が大して廣く行はれてゐない爲か、比較的反響を呼び起したと少く、西洋に於ては勿論、我が國に於ても依然としてこの問題は舊來の考の下に扱はれて居ること、例へば佛教學者の迦膩色迦王を説くものがみなこれを甘肅地方に據つた月氏の後身と考へて疑ふところなきが如き、或は月氏の人種を論ずるに當り、貨幣に刻出せられてある迦膩色迦王の容貌を一つの根據とするが如きである。かくこの論文中の一節が一般に知られてゐないとすれば余は先づ敢てこゝにその要旨を紹介して置かねばならぬ。

大月氏種族の建てたものと認められて居る五翽侯は、漢書の本文を正當に解釋するならば誤つた認定で、較ろ大夏に屬するものと認めるが至當ではあるまいか。この五翽侯のことを初めて書いて居る漢書の西域傳には、